

## コミュニティーの哲学

菅 支 那 子

一年に亘る此度の歐洲・中東旅行の中で、特に中近東を訪ねるように私共をかりたてた願望の一つは、マルティン・ブーバー教授に遭うことであつた。可なり綿密な計画とヴェルサイユ宮殿へのバスの中で、はからずも知りあつた某ユダヤ人の手づるとによつて、なかなか面会のむずかしいブーバー教授を、三月五日の午後、イスラエル側のエルサレムにある彼の私宅に訪問する願いがかなえられた。一九三八年頃、彼の *I and Thou* を教材として、小さなクラスで読んで以来の夢が、此度実現されたわけである。

組織的ではないが、深淵な洞察力と創造力に富む宗教的詩的哲人で、キリスト者の間にユダヤ教の理解を深める意味でも大きな役割を演じている。過去半世紀に亘り、ブーバーが及ぼした影響は極めて大きく、世界中到る処に見うけることが出来る。殊に現代一流の哲学者、神学者の間で、ブーバーは動かし難い地位を占めると云われている。

「社会福祉」第四号の中心課題をコミュニティーの諸問題とするに当り、私も甚だ未熟ながら、「私と汝」の哲学に導かれて、コミュニティーの本質を把握して行こう。しかし序でながらここで一言して置きたいのは、ブーバーと対談した折、彼が繰返し述べられたことは、世界的名声を博した彼の著「私と汝」よりも、その後に続いて出版された「人間と人間との間」を、もつとよく知つて貰いたいと話されたことである。従つてコミュニティーの本質を考察するに際し、人間とは何ぞやを主題とする彼の「人間と人間との間」を合わせて味読、玩味して行くことにする。

「I and Thou」の第一部では、人間の二つの根元的態度と關係、I-Thou と I-It についての定義がながながと

述べてある。人間が発する I は、これら二つの根元的な言葉のうちの Thou 又は It を云い表わす時、その行動の中で生れて来る。しかしこれら二種類の I は決して等しくない。「根元的な言葉、I-Thou は全存在——全身全霊——を以て始めて口にすることが出来る。根元的な言葉、I-It は全存在を以て云い表わすことは出来ないのである。」(Buber : I and Thou p. 3)

人間が彼の立場を決定する根元的な言葉の決め手は彼の前に相対してある対象物ではなくして、その対象物に自分を関係させるさせ方である。I-Thou は関係を示す根元的な言葉である。相互依存、直接性、現存性、強烈さ、又言語で現わし得ないこと等をその特長とする。人格と人格的なものが真に存在するのは、I-Thou の関係の中に於てのみだと云わねばならぬ。しかし I-Thou の Thou は人間に限られないで、動物、木、その他の自然界の事物、神をも含み、至つて広義に用いられる。I-It は経験したり使用したりする作用に関する根元的な言葉である。そのような作用は個々の人間の中で起るが、彼と世界の間には起らない。それ故全然、主観的で、相互依存性を欠いている。知る作用の場合であれ、感ずる作用の場合であれ、或いは行う作用の場合であれ、それは代表的な主観・客観の関係である。この関係は常に間接的で廻り遠い。しかも I-It の It は根元的な言葉の意味を少しも変えないで、彼であつても、彼女であつても、動物であつても、事物であつても、精神であつても、或いは神であつても等しくよいわけである。このように経験する作用は事物を経験する場合でも人間を経験する場合でも、その経験が内的でも外的でも、開放的でも秘密的でも、何れの場合にしろ、I-It の関係でしかないのである。人間はこのような It の世界に連続的に、且つ安定して生活することが出来る。しかしこのような I の世界だけに何時までも生き続けて行くならば、彼は人間ではなくなつてしまふ。と云う理由は、「凡ての眞の生活は出遭エントラフだからである。」(前掲書 p. 11)

人間が彼の汝としての他人に出遭う時にのみ、彼は真に具体的な人間となることが出来る。人が自分の Thou としての他の人間に直面する時、彼は最早、事物中の一つの事物でも、経験されたり叙述され得る自然でも、或いは空

間と時間に支配される特殊な一点でもなくなつてしまふ。Thouに出遭う時、人間は最早、因果関係や運命に従うことはしない。因果関係や運命は連続的で秩序ある世界の下婢であつて、そのようなI-Thouの世界から意義をくみ取つてゐるに過ぎぬからである。

I-Thou 関係が意味する現在は「度何かが起つたことを現わす過去と現在の間にある抽象的な点ではなくて、実在する、そして内容に充たされた現在である。神秘家の所謂「永遠の今」の如く、強烈で全体性のある現在である。しかしそれは魂の中にはなくて、出遭いと関係がある限りに於て始めて存在する。これに反してI-ItのIは瞬間を経験するが、その瞬間は経験されることと使用されることで一杯になつてゐる故に、現在が持つべき本来の内容を持たない。それが彼に意味を持つようになるのは、それが完了されてしまつた場合のみである。

Itの経験は予め計画され得るし、意図され得るものと云える。しかもItを経験するその人間はそうするため自分の外に出て行かない。Itは応答しないで、唯だ受動的に経験されるがままにまかせてゐるのである。それに反してThouは恩寵によつて先方から人に出遭うのである。しかしそのためにはThouを知る人は出向いて行つてThouと出遭い、Thouと直接の關係を持つよう、こちらから先方に積極的に突入して行かねばならぬ。そうすればThouはその出遭いに応答する筈である。その時人は他人の全存在と始めて關係を持つことを許される。そのよくな關係を通し、Thouと呼びかけることを通して、始めて人は他人の全存在に集注し、全存在の中に溶け込むことが起るのである。「私がIと成る時、私はThouと呼びかける。」(前掲書p.11) この關係は受動と能動が一つになることを意味する。受動であるのは人が選ぶと共に選ばれねばならず、全存在を以て行動するためには、凡ての部分的な行動を停止せねばならぬからである。

又關係という行動はIの内にとどまつてゐる情緒でも感情でもない。純粹な關係は私と汝の間にある愛である。感情は愛に随伴するが、愛を構成してゐるわけではない。「感情は人間の中にあり、人間は彼の愛の中にあるのであ

る。」(前掲書p.14)そして汝も私と同様、愛の中にある。と云うのは愛は「Thou」だけをその内容として、即ちその対象として持つような仕方だ。「I」にしがみつかないからである。愛は私と汝の間にあるのである。愛する人の前では、人々はその善悪、賢愚の性質から解放され、汝として全身全霊を以て彼に直面するのである。それ故、愛は素晴らしい感情を享樂することでも、「TristanとIsolde」の恍惚に比すべきものでもなくして、「Thou」に対する「I」の責任」(前掲書p.15)なのである。

従つて憎しみは存在の一部だけを見ているわけである。若し人が全存在を見ていて、しかも尚憎み続けるならば、その人は最早、関係の中にはおらず、「I」の中にいると云わねばならぬ。何故ならば他人に向かつて「Thou」と呼びかけることはその存在の肯定を意味するからである。しかも率直に憎む人は憎愛の念なき人よりも、関係に一層、近くあると云えよう。憎む人にとつては、憎愛がその対象ではなく、彼は無関心な人から区別して、その憎む相手を中心に抱いているからである。このように全き「I-Thou」の関係のみが愛を意味するのではあるが、知られ、又用いられる対象物として人間を扱うよりも、憎む方がよりましなわけである。

子供は見ることに、聞くことに、触れることに、作ることを通して、自分の世界を自分で見出さねばならぬ。そのような世界は既成の世界として、彼の前に唯横たわつてゐるわけではない。その世界は立ち上つて来て、彼の感覚に出遭い、創造せられた宇宙万物の本質を、いろいろな形として示すのである。この過程の中で、関係を樹立しようとの努力——玩具の熊に対してでも、土瓶に対してでも、何に対してであつてもかまわぬ——が先ず最初に現われ、それに続いて事実上の関係、即ち言葉なしに「Thou」と呼びかける働きが現われる。後になつて始めてその関係は私とその事物とに分離する。それ故に「始めに関係あり」(前掲書p.18)「生れながらの汝あり」(前掲書p.27)と云わねばならぬ。そしてそのような生れながらの汝は子供が彼と出遭うものと生きた関係を持つようになつて始めて、実現されるのである。「Thou」として自分に相対するものとの關係を子供が実現し得るその事實は、a prioriな關係にその基礎

を持つている。即ち自分と世界との間に存する関係の可能性によつてゐるのである。汝と出遭うことによつて、子供は次第に「I」を自覚するようになる」と云える。しかし最後に彼は汝との関係を失ひ、孤立した事物として、自然物の次元に縮小してしまつた「I」の「It」として「Thou」を知覚するようにも墮落するのである。

斯様にして「I」と「Thou」との間の沈黙の又語りあわれた対話の中で始めて、人格と人格の知識との両者は創造されるのである。「I—It」関係についての主観・客観の知識と異なり「I—Thou」関係の知識は主観的でも客観的でもなく、感情的でも合理的でもなくして、「間」の中で「in the between」即ち全存在、活動する存在の相互関係の中で起るのである。同様に人格は単に個人的な事柄でも、単に社会的産物でもない。人格は関係の本来の目的である。私共は他人とは違ふという意味で生れながらの個人であるが、生れながらの人格ではない。私共の人格は私共と関係する人々によつて、創造されるのである。この事は人間が単に社会的有機体の一細胞であることを意味しない。人格になるとは心の奥底から、日々起つて来る事柄に応答する人になることを意味する。

ブーバーの人間学に従えば、人間存在の根元的事實は、人間は人間と共にあることである。この人間も人間が出遭う世界、「the sphere of between」のことを対話的と呼んで「I and Thou」哲学の發展だと云われる。「Between Man and Man」で、ブーバーはまず対話の生活を説明する。彼に従えば、対話には三種類がある。発言されたものであれ無言のままであれ、真の対話に於ては、参加者の一人一人は一人又は多くの他人が特殊の存在を持つており、且つそこに現存している事実を真に意識して、自分と彼らとの間に生きた相互関係を打ちたてようとの意図を以て、彼らに向かつて行くのである。これは文字通り毎時間、又極く普通に起つてゐる事実である。あなたが誰かを見て、その人に話しかけるならば、勿論、あなたの体と必要な程度あなたの魂とを、共にその人の方に向けて話す筈である。その際、あなたの注意を彼の方に向けてるのである。ルドウィッヒ・フォイエルバッハは既に一八四三年、「真の論理は孤独な思想家がする彼自身との独語ではなくて、私と汝との対話である」と述べてゐる。次に客観的理解の

必要に促されてする技術的対話がある。又対話に仮装した独語がある。独語の中で二人或いはそれ以上の人々は云わば空間の中で出遭い、不思議に廻り廻り遠い方法で、各自が自分自身と語りあう。それでいて自力でやるより外仕方がない苦しさを逃避し得たと感じているような場合である。

序ながらブーバーは眞の対話<sup>ダイアログ</sup>を明り浮び上らせるため、それとは違う人間間の対談から眞の対話を区別して、詩的な表現を用いつつ、次のように説明する。例えば討論 debate に於ては、思想は心の中にあつた通りに表現されないうが、論ずる時には非常に辛辣になつて鋭く急所を衝く。その上、語りかけられた人間はそこにいないのに、その人間が恰も現存しているかのように考えられている場合である。会話 conversation と云うのは何事かを伝達しようとか、何事かを学ぼうとか、何者かに影響を与えようとか、何者かと関係を結ぶとかの必要から出發してゐるのではない。専ら自分自身の自恃の力が強くなるのを見て、それを益々確実にしようと思い、自恃の力が不安定であれば、強化されるよう願つて行くことをその特長としてゐる。親しい雑談 a friendly chat と云うのはそれに従事する各自が自分を絶対的で正当であり、相手を相対的で疑わしいと見做してゐる場合である。愛人同志の話 lovers' talk に於ては、両方の参加者は等しく自分自身の素晴らしい魂を味わい、尊い経験を持つてゐるのに過ぎないのである。――これこそ対話の顔なき亡霊が住む地下の世界だと云うべきであらう。(Buber : Between Man and Man p. 19—20)

又ブーバーは人間の考える営みについて、次のように警告する。若し私共が私と汝との間で考えることに關して眞面目であるならば、ただ単に思想によつて構成された、思想のもう一人の主体の方に思想を向けるだけでは十分でない。考えると共に、即ち正しく考える営みと共に、思想によつて構成されないが、私共の眼前に身体ごとそのままをつくり存在している他の人間のために生きるべきである。隣人の具体的な生活のために生きるべきである。その人の思想以外は何も知りたくないと願わないうような、もう一人の思想家に對してではなくして、その人が思想家であれば、その人の思想の尚その上に、彼の身体生活のために――寧ろ思想も活動も確かにその人に屬するその隣り人のために生

きるべきである。(前掲書p.28参照)

尚コミュニティーという小題の下で、ブーバーは次のように説明する。集団と云うのは結合することなく、束ねられることを意味する。行軍する際、その足どりを鼓舞する生命が人から人へと伝わるのを感じつつ、多くの個人が同じように武裝して群がることである。これに反してコミュニティーと云うのは、多くの人々が相並立していることではなくして、相互と相共にある事である。このような人々は一つの目的に向かって進んでゆくが、尚他人の方に向かうこと、他人に動的に直面すること、一からThouに流れて行くことを何処でも経験するのである。コミュニティーはコミュニティーが生ずるところに存在する。集団は人間存在が組織的に減退することを特長とするに反し、コミュニティーは相互に向かつて生きられた生命が増大し、確立して行くことをその基盤としているのである。

(前掲書p.31参照)

同じ思想は「人間と人間との間」の最後の部で、更に拡大され深められて行く。個人主義に於て人間はどんなに懸命に考えようと、彼の根元的状態を空想的に考える結果、架空的に、即ちそうでないのに自己を宇宙の中心に存在する人間だと主張する結果、益々その人間性が損われて来る。ところが集団主義に於て人間は自分がする決断と責任を断念するので、自分自身を放棄してしまうことになる。両方の場合とも、人は他人の中に突入して行くことが出来ない。真の人間と人間の間にのみ、真正の関係は存在するのである。(前掲書p.282参照)

生活と思想の問題は同じように疑わしい状態にあると云える。生活は個人主義と集団主義との何れかを選ばねばならぬと誤つて考えるように、思想も個人主義的人類学と集団主義的社会学との何れかを選ばねばならぬと誤つて考えている。真正な第三の道が発見されれば、問題解決の方法が示されるわけである。

人間存在の根本的事実は個人そのものでもなければ、集団そのものでもない。個人も集団もそれだけを考えるのでは大きな抽象化をすることになつてしまう。個人は他の個人と生きた関係に入つて始めて存在する事実となる。集団

は生きた関係の単位から作り上げられて始めて存在する事実となる。人間存在の根本的事実は人間は人間と共にあること *man with man* である。人間に固有な特長はある事が一人の人ともう一人の人の間に起ることであつて、これと同じことは自然界の何処にも見出し得ないのである。言語は符号に過ぎず、人間と人間が通じ合う手段でしかない。しかし人間精神がなす凡ゆる業績は言語によつて励まされている。人間は言語によつて人間につくり上げられる。しかも言語はその途中で開花するが、又朽ち、枯れてしまうことがある。言語は一存在がもう一つの存在を特殊な他の存在として、その存在に向かつて行くことに根柢を有する。そのような営みの目的は両者に共通であるが、それぞれの範囲——領域——の彼方で互いの存在と相通じるためである。この領域は人間としての人間の存在で確立されているが、概念的には尚、理解されていない領域で、ブーバーはこれを「間の領域」“a sphere of between”と呼んでいる。これは人により異なつた程度で実現されるが、人間の実在の第一の範疇である。ここでこそ真正な第三の道が始まらねばならぬのである。(前掲書p. 203参照)

・この *between* は補助的構成要素ではなく、人間と人間の間に起る事柄の眞の場所であり、人間と人間の間には起る事柄のない手である。主観的なものの遙か彼方に、客観的なものの此方の側に、I と Thou が出遭うせまい春に、*between* の領域は存在するのである。

*between* の実在は哲学的人間学のため、その出発点を提供する。ここからして一方では人間に関して全く今迄とは違つた理解が、他方ではコミュニティーに関して全く今迄とは違つた理解が生み出されるであらう。従つてこの学の中心課題は個人でもなければ集団でもない。それは人間と共にある人間 *man with man* である。人間固有の本質は生ける関係の中で、始めて直接に知られ得るのである。ゴリラも一個体であり、白蟻も亦一つの集団である。しかし私と汝は人間の世界にのみ存在する。人間は汝と関係して始めて存在し、更に私は汝との関係を通してのみ存在するのである。人類学と社会学を包む哲学的人間学はこの *between* を出発点として、「人間と共なる人間」を考察



しなければならぬのである。若し個人だけを単独に考えるならば、月について知ると同じことを人間に關しても知ることにならう。人間と共なる人間のみが十全な人間の姿を呈するのである。又集団だけを単独に考えると、銀河について知ると丁度同じだけのことしか人間について知らないことになる。人間と共なる人間のみが完全に描かれた人間の姿なのである。人間と共なる人間を考えると、そこには動的で、二要素のある人間生活、与える人と受ける人、行動する人と辛抱する人、攻撃する力と防衛する力、研究する性質と知識を供給する性質、求められる要請と容れられる要請、これらの両方は常に共にあつて、相互貢獻の中で相互を完成し合い、共に人間を表示しているのである。

以上ブーバーの思想について出来るだけ忠実に理解しようと努めて来たが、彼も主張する通り、人間存在は「I」に對する「Iの責任」にあり、眞のコミュニティーも責任に囲まれた人間、Ihouの呼びかけに答える「I」によつて始めて構成されることを、もう一度確認して置こう。云う迄もなく人間存在は責任に囲まれた存在である。人間生活はその本質に於て、責任ある存在だといふその事實に、人間性 *humanitas* は帰因しているのである。丁度つり橋の伸張——緊張——が二つの支柱の間にあり、つり橋は二つの支柱の間にかかることによつて両方を結びつけているといふその事實に帰因するように、人間生活にその独自性を与える緊張——責任——は「I」は常に「Ihou」に直向するという事實によつて決定されるのである。このような緊張——責任——を通しての統一が人間的要素なのである。しかもこの責任を離れて、人間は存在しない。人間の存在は責任であるという事實は、「I」は「Ihou」と接觸して始めて出現して来るからである。F・ゴガルテンはこの眞理を再発見した人の一人であるが、このことを「I」は「Ihou」から出て来る」とも云つていたのである。

しかし「Ihou」は「I」と同様に決して單純な事實ではない。汝はある特定の仕方では私に与えられねばならぬ。それによつて私は汝を、私が存在を負うているその汝として認めるのである。私は汝から私の方に來る要求、即ち私を責任ある存在にする要求に耳を傾けなければならぬ。私は自分を聞く私にすることが出来なければ、汝は汝を私に呼びかける者にすることも出来ない。私共は相互のためにつくられていなければならぬ。私が汝の中で二つの事實を認め

るような仕方では、汝が私に与えられねばならぬ。即ち第一、私は汝に対して責任があり、第二、私の生活は凡てこの事から成立つていようという二つの事実である。私をして汝に責任あるようにさせる唯一の力は神である。汝に対して責任があるとは、汝との様々な生活の中で、神自身によつて私は汝と結びつけられることを意味する。私共の責任は結局、神自身の上にその基盤を持つのである。人間の存在は私共が知る他の凡ゆる種類の存在とは異なり、責任に囲まれた存在であり、人間が客体でなくして主体であるような種類の存在であり、応答するように呼びかけられ、語りかけられる存在である。これは人間存在が自己中心的でなく、孤立せず、彼の存在が関係していること—relatedness—の中にあることを意味する。斯く人間存在は人生の始めと終り——人生は何処より来り、何処に行くか——と関係があるのである。この責任に囲まれた存在についての具体的表現は、人が他人に対し責任を負うている実際の事実の中に示されているのである。

斯様に責任あり、互恵的な存在としての人間存在の意義は既に述べたように愛である。愛を表現しないような凡ての人間関係は異常的である。この愛が私共の生活の全意義であり、且その基盤であると、私共はイエスの中で教えられている。ここで創造者は愛の中で、愛によつて、愛のために私共人間を創造した主として、自分を啓示している。神が人間に人間の眞性を啓示する。否、神は人間にその本来の性質を回復して下さるのである。私共にとつて自然な生活は人間的存在であること、責任に囲まれた存在であること、召喚に応答する存在であることが神の中で、私共に明瞭にされるのである。又人格は神聖なもので、与え、仕え、分ち合う時、始めて十分に実現さるべきものであると、イエスは教えている。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかしもし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者はそれを保つて永遠の命に至るであろう。」(ヨハネ伝十二の廿四、廿五) 魂づくりの神の逆説によれば、その魂を失うことがそれを得ることを意味する。これこそが創造的復活の道であり、人間に示された唯だ一つの道である。自己実現は自己犠牲と自己放棄を通して始めて可能なのである。その兄弟を愛せぬ人は死に住むのである。

斯くいエスは教えているが、もの皆凡てが獲得、利用、死蔵の営みに夢中になつてこの世にあつて、このよくなことを信ずるのは至つて困難である。しかしこれは人間にとつて根本的事実であるから、私共はこの事を信じないわけには行かない。生命は中心で動き、拡大するため、自己を越えて、彼方を見つめるのである。人間についての根本的事実は、人間がコミュニティーをつくる存在だということである。人間は家族という集団の中でこの世に生れ、種々なる集団の中で交りの生活をする。William Temple は云つてゐる。「人間を何処で見出そうと、どの発達段階であろうと、ある様式のコミュニティーの中に見えるのを見出す。両性間に等しく感じられる共通の必要性はそれの最も簡単で、深い例である。次に子供が両親の保護と世話を必要とする永い期間が続く。家族は人間存在の根本的事実である。どのように文明が続こうと、家族はその根から木の如く成長するのである。」

それ故抽象的個人というようなものはない。この事実の論理は、人は独りでは殆ど人間ではないということである。他人との関係に於て、人は始めて自分自身たり得るのである。個人をただ個人として見るのでは、個人を真に理解することは出来ない。コミュニティーの中の個人として始めて彼を理解することが出来るのである。人間は本来、コミュニティーの中で自分を実現する。コミュニティーは人格にとつて本質的である。人格は本質的にコミュニティーの産物である。人間がつくる凡ゆる関係に於て、友人間、兄弟間、愛人同志、主人と下僕、親と子、夫と妻の間の如き関係に於ては、人格の交りがある。それによつて人間は精神的価値の世界に突入して行くのである。人格の本質的特長は愛することの出来る能力だと云われている。人間の関係を通して、魂は愛の中で魂に結合すると云つても過言ではないであろう。人間的関係に入つたその瞬間に、人は單なる本能的結合から道德的交りに移る。先きに進む程深く精神的関係に入つて行くのである。

T. S. Eliot も

「生活を共にしないならば、如何な生活をするか云うのだろうか？ コミュニティーの中になく生活はない。しかも神を讃めて生活しないコミュニティーはあり得ない」と云つてゐるのである。